

## 第19回 長女、その夫と跳ねる！走る！翔び続ける！



今回は、夫1人と3人の子持ちの、四十路の長女のお届けします。

彼女はこのコラムでもこれまであちらこちらでチラチラッと姿を見せましたが、今回は、イマドキの女性研究者として登壇してもらいます。

長女は、鉄道と働く車オタクの長男や次男とは異なり、絵本オタクでした。

もっぱら夫が担当した就寝前の絵本の読み聞かせが大好きでした。

文字を覚える前から気に入った絵本の文言を「音」で丸覚えし、日常会話でも、彼女の口から絵本由来の文言が飛び出すことがたびたびありました。

好きな絵本だと、全フレーズをそらんじていました。(もともと、自分の子供には読み聞かせはしていなかったとのこと。ずるっ！)

文字を覚えた後の彼女の生活には、漫画が絵本に取って代わりました。

中学や高校生になっても、彼女の日本史や世界史や地理の知識は教科書ではなく、もっぱら漫画が出典元でした。

漫画のおかげで数々の試験をすり抜け、そして今でもフル活用しています。

完全変態の後、長女はアメリカのハイスクール生活に未練を持ちながらも、獣医師になりたいという希望を抱いて、日本での高校生活に復帰しました。

しかし、努力も空しく大学受験で不合格となり、浪人生活に突入しました。

実は、入試に合格した大学もあったんだよねと、最近になって白状しました。

しかし、合格した大学が近畿圏にあったのがダメだったのか、学部が気に入らなかったのか、入学せずに浪人しちゃいました。(ナヌーッ、私も夫も知らなんだ！おヌシやりよったな！)

\*\*\*\*\*

一年の浪人生活を経て、獣医学部はハードルが高すぎるからとさっさと断念して、念願の大学の薬学部(当時は4年制)に合格し、晴れて北海道の地を踏みました。(なんや、ターゲットは学部じゃなくて、北海道だったのねっ！)



そこで、まず目指したのが、アメリカンフットボールのマネージャーであり、それを土台にした「アメフトの審判」でした。



こうして、学生アメフトの数少ない女性審判になりました。

同時に、薬学部の1年先輩のアメフト選手を夫としてゲットしました。

その北海道時代に、彼女から「研究者になりたいんやけど、免疫学はどう？」と聞かれたことがありました。それに対して「うーん。どうかな。免疫学には手付かずの大物研究領域が無くなっているんで、やめといた方がエエと思うよ！」と、ついホンネで答えてしまいました。

ついでに何の根拠もなく一言、神経科学なんかどう？と言ってしまいました。

その頃、実は、彼女は学部の女性教授が主催する神経科学の研究に興味を持ち、機会があるたびに研究の内容について質問をしたり、自分の研究者としての進路を相談したりしていたようです。

こうして、彼女は、しっかりと、研究目標と良きメンターをゲットしたのでした。卒業後は、その教授の母校の大学院に進学し、医学博士号を取ったのでした。

彼女が博士課程に在籍中のことです。申請者と面接官という関係で私とニアミスをしたことがありました。日本学術振興会、通称学振が主催する特別研究員の面接審査の面接員に急遽欠員ができ、私に、専門が異なる領域の面接員のお鉢が回ってきた時のことです。

面接が始まる前の打ち合わせで、係官が「利益相反を確認して下さい」と面接員に注意を促した時も、専門外なので知り合いはおらんやろ、とタカを括っていました。

そんな中、何気なく申請者リストに目をやると、なんと長女の名前があったのです。

エッ？マジっ？！即座に「利益相反」を申し立てて、彼女との面接をすんでのところで免れました。

面接審査が終了したあと、廊下で彼女とすれ違った際に、「よっ！」と声をかけました。

豆鉄砲を食らった鳩よろしく、目を白黒させていました。

久しぶりに驚かしたった！痛快！痛快！

\*\*\*\*\*

学位取得後は、神経科学の画期的な研究手法である **optogenetic mouse** の作製に長けている先生がいると聞き及んで、長女はその先生に突撃インタビューを申し込み、エエヨ！という承諾を得て、先生が所属する関東にある大学のポスドクになりました。

運よく、ライフイベント中のポスドクを対象とする学振の特別研究員 **RPD**（リスタートポスドク）も取得して準備万端です。

ポスドクとして赴任するために、長女一家が転居した時のことです。

子供たちを保育園に入園させようと、市役所に入園申請書を持っていき、学振の **RPD** の書類を見せて、保育できない理由を説明しました。

ところが、担当者は「これは就業ではなく研究なので、保育園の入園規定には当てはまらない」と言いながら申請書を通らなかったのです。

国が、ライフイベント中の女性研究者の研究継続を目的に制定した画期的な制度なのに、子供の保育園の入園却下とは！？本人も、その夫も、私も、私の夫もびっくりするやら、怒るやら、悲しむやらでした。最終的には、入園先が決まりほっとしました。が、私たちが30年前に受けた仕打ちを2代目も受けるとは！日本の保育行政はどないなってるねん！！

日本のポスドク修了後は、視線を海外に向け、世界をリードする研究者をみつけて、彼女は米国留学にさっさと出かけて行きました。そのポスドクを6年で卒業して、この春、一家は揃って無事に帰国しました。



\*\*\*\*\*

長女は大学院生時代に子供を3人もうけました。

彼女の研究は私の研究と同じくマウスを用いるもので、研究施設でしか研究ができません。

留学するまでは、彼女の夫が薬剤師として働いて生計を担い、家事・育児をシェアして、彼女が研究できるように一貫して支え役となりました。

彼女のアメリカ留学が決まると、夫の彼は迷うことなく一緒に渡米し、家事と子供の世話を一手に引き受けました。日々の食事作り、キンダーガーデン・プレスクールに始まる学校への徒歩での送り迎え、レンタカーを借りての遠出では運転手、コロナ禍での子供たちのWeb授業のお助け、などなど。

日本にいたころは料理が苦手で、料理だけは娘が担当していたのですが、アメリカ滞在中に、ついに、お菓子を作れるまでに上達しました。

アメリカでは持ち寄りパーティが頻繁にあり、日々上達する腕前を披露していたのだと思います。

私の夫も、当時としては見上げたものでしたが、長女の夫の度量はそれをはるかに凌駕するものです。

まだまだ男女の役割に思い込みが蔓延っている日本で、「男の役割」を踏みにじり続けてきた彼の来し方は、「特大天晴れ！」ものです。

彼がいなければ、長女はここまで翔べなかったでしょう。これまで、本当にありがとうございました。そして、これからも、平に、平に、よろしく願い申し上げます。もう時効なので、返品はできませんから。



長女とその夫と子供たちの鬼気迫る武勇伝はまだたくさんあります。

しかし、それは彼女の将来のコラム用に残して、今回はこれにて、ちゃん、ちゃん。

\*\*\*\*\*

こぼれ話：冒頭の写真の木彫りの人形は、夫が、小学生の長女と次女、そして私の母と一緒にグアム旅行に

行った際に購入した私へのお土産です。

私は、サンフランシスコでの学会に参加するため、グアム旅行には不参加でした。

店頭で、この人形を目にするや、2人の娘は「お母さんや！」と叫びながら走り寄って、手に取ったと夫から聞きました。

この人形は、もう少ししたら、私を離れ、彼女たちの手元に無事帰還するでしょう。

